

稻作生産情報第2号

平成29年4月4日
青森県「攻めの農林水産業」推進本部

-
- 浸種は丁寧に、催芽は「ハト胸状態」を必ず確認しよう。
 - 健苗育成と適正施肥で、良食味・高品質米を生産しよう。
-

<育苗作業>

1 は種準備

- (1) 苗代予定地に雪が残っている場合は、消雪作業を急ぐとともに、排水溝を設置するなどして、置床の乾燥を早める。また、育苗ハウスに損傷がみられる場合は、作業に支障がないよう早めに補修する。
- (2) 苗代の設置場所が風当たりの強い場合は、必ず風囲いや防風ネットを設置する。
- (3) 置床の耕うん、整地、均平は丁寧に行う。折衷苗代では、過湿を避けるため、床の固さを耳たぶ程度として育苗箱の沈み込みを防ぐほか、排水溝を設置する。
- (4) 浸種や催芽作業は、出芽を揃えるため、ハト胸程度（芽の長さ0.5～1ミリ程度）に仕上げる。
- (5) は種作業が遅れ、浸種中に芽が動き始めた場合は、浸種を切り上げて水を切り、ビニール等でくるんで冷暗所に保存し、芽の伸長を抑える。

2 は種

- (1) は種量が多すぎると軟弱な苗になりやすいので、箱当たりのは種量は、催芽糲で成苗55g、中苗125g、稚苗250gの目安を守る。
- (2) ハウス育苗では、出芽を揃えるため、は種時にかん水を十分に行う。
- (3) は種後に、気温が低く出芽の遅れが懸念される場合は、出芽を促進するため、育苗箱を育苗器で24時間程度30～32℃に加温してから置床に設置する。

3 育苗管理（中苗）

(1) 温度管理等

- ア ハウス育苗では、出芽期間中の水分保持と保温をするため、育苗箱をシルバーポリトウ等で被覆し、折衷苗代でも、低温などで出芽の遅れが懸念される場合には、必ず被覆資材で被覆する。
- イ 出芽が（80%程度）になったら速やかに被覆資材を除去し、覆土が持ち上がっている場合は、かん水等により落ち着かせる。その際、糲が乾燥しないよう露出した部分に覆土する。
- ウ 苗代には、温度計を設置し、表1のとおり生育ステージに応じたきめ細かな温度管理を行う。
- エ 晴天の日は積極的に換気を行って温度を調節し、風が強い時には、育苗ハウスの風下側を開けるなどして、温度の上昇を防ぐ。
- オ 降霜や低温が予想される場合には、ハウス育苗では苗を被覆資材で被覆するとともに、石油ストーブなどで保温する。折衷苗代の場合は、被覆資材を二重にしたり、排水良好な苗代では、育苗箱の肩の高さまで湛水して保温する。

カ 田植え1週間前頃には、丈夫な苗に仕上げるため、夜間もハウスやトンネルを開放して、外気に慣らす。
この期間中、降霜が懸念される場合は、才に準じて管理する。

表1 生育時期別の温度管理の目安

生育時期(イネの葉齢)	日中	夜間
箱設置～出芽期	35℃まで	10℃以上
出芽期～1.5葉期	30℃前後	5℃以上
1.5～3.0葉期	25℃前後	5℃以上
3.0～3.5葉期	20℃前後	5℃以上

(2) 水管理

ア かん水は、機械的に毎日行うと、徒長・軟弱な苗となり、病害が発生したり、田植え後の生育にも影響するので、箱土が乾いて苗の葉先が巻き始めたら、午前中のうちに、育苗箱の底までしみ込むよう十分に行う。

イ 折衷苗代では、床土が乾燥したら、踏切溝(置床の間の通路部分)に水を入れ、水分の補給を十分に行う。

(3) 追肥

追肥方式で育苗する場合は、1.5葉期頃と2.5葉～3.0葉期頃を目安に、硫安を、1箱当たり500mlの水に現物で5g(窒素成分で1g)溶かして、朝又は夕方の日差しの弱い時に、目の細かいジョウロなどで施用し、葉が乾く前に、肥料やけを防ぐためかん水する。

4 病害虫の防除

(1) いもち病や初期害虫等を予防する箱施用剤は、薬剤毎に使用時期や方法が異なるので、農薬の登録内容等を確認して適正に使用する。

(2) 育苗後、苗床跡で他作物を栽培する場合の箱施用剤は、以下の点に留意して処理する。

ア は種時～育苗期間に処理する場合は、置床にビニールなどの無孔シートを敷き、箱施用した農薬が置床にこぼれ落ちたり、かん水とともに農薬が置床に浸透しないようにする。

イ 移植時に処理する場合は、ハウス外で施用し、やむを得ずハウス内で行う場合は、置床に農薬がこぼれ落ちないようビニールなどの無孔シートの上で行う。

<本田作業>

1 畦畔のかさ上げと補強

(1) 畦畔は、用水を効率的に利用するとともに、低温時に深水管理ができるよう、かさ上げや補強を行う。

(2) 漏水の激しいほ場では、畦畔補強時にベントナイトを用いて以下のとおり畦畔を造成すると、漏水防止と水管理の省力化に有効である。

ア ほ場側の法面を畦塗機のロータリーノコで崩す。

- イ 崩した畦畔の崩壊面に、畦畔1m当たり8kg程度のベントナイトを均一に散布した後に、畦塗機で畦畔を成形する。
- ウ 次年度以降は、畦塗機による畦畔成形のみを行う（効果は5年以上持続）。

2 本田施肥等

- (1) 消雪が遅れ、滯水している水田では、排水溝を作り排水に努める。
- (2) 多肥栽培をやめて、地帯別・品種別の施肥基準を守り、食味・品質の向上と気象の変動に即応できる米づくりを行う。
- (3) 施肥は、表2及び表3を基本に、水田ごとの土壤タイプや稻わら施用状況等を勘案して行う。特に、「青天の霹靂」については、良食味の特性を生かすため、栽培マニュアルに基づいた施肥量を遵守する。
- (4) 堆肥等の有機物やケイカル、ようりん等の土づくり肥料は、低温や病害等に対する抵抗力を高めるので、土壤診断に基づいて適正に施用する。

表2 基肥全層施肥体系

施肥体系	施肥窒素の形態		施肥窒素割合 (総量に対する割合)		追肥時期
	基肥	追肥	基肥	追肥	
穂肥1回	速効性	速効性	70～80%	20～30%	幼穂形成期
穂肥2回	速効性	速効性	60%前後	1回目、2回目とも20%前後	1回目：幼穂形成期 2回目：減数分裂期
全量基肥	被覆尿素複合肥料の全量基肥施用。施肥窒素量は穂肥1回または穂肥2回の窒素総量(基肥+追肥)の5～10%減肥。				

- 注1) 全量基肥に使用する被覆尿素複合肥料は、L Pコート70日タイプを50%配合したものか、これと同等の肥効のものを使用する。
- 2) つがるロマンは穂肥1回(速効性)とし、追肥量は窒素成分で2kg/10a以内とする。

表3 基肥側条施肥体系

施肥法	施肥窒素の形態	施肥窒素量
側条全量基肥	被覆尿素複合肥料	穂肥1回または2回の窒素総量(基肥+追肥)の10%減肥。
側条穂肥1回	側条施肥用速効性肥料	基肥量：穂肥1回の基肥量の15～25%減肥。 追肥量：穂肥1回の追肥量と同量。

- 注1) 側条全量基肥に使用する被覆尿素複合肥料は、L Pコート70日タイプを50%配合したものか、これと同等の肥効のものを使用する。
- 2) 側条穂肥1回の追肥は葉色をみながら幼穂形成期5日前～幼穂形成期に行う。

3 大豆作付後の復元田での施肥

- (1) 基肥・追肥は、倒伏防止と収量・品質の安定に重点をおいて、表4及び表5のとおり減肥する。
- (2) 基肥は、基準の範囲内で、グライ土は少なめ、砂質土、黒ボク土及び灰色低地土では多めとする。また、追肥の時期と量は、土壤条件や生育量及び葉色を見ながら調整する。

表4 大豆作付後の復元田での「つがるロマン」の施肥基準

項目	基肥（慣行対比）	追肥（10a当たり窒素量）
復元初年目	0%	0kg
復元2年目	50～60%程度	1～2kg程度
復元3年目以降	慣行どおり	

表5 大豆作付後の復元田での「まっしぐら」の施肥基準

項目	基肥（慣行対比）	追肥（10a当たり窒素量）
復元初年目	0～20%程度	0～2kg程度
復元2年目	60～70%程度	2～3kg程度
復元3年目以降	慣行どおり	

春の農作業安全運動を展開中です（4月1日～5月31日）

- 1 高齢者の事故多発！農作業は、焦らず、急がず、慎重に！
- 2 ほ場への出入りや傾斜地は要注意！トラクターには安全フレーム等を装着し、転落・転倒を防ごう！
- 3 機械点検時には必ずエンジン停止！機械への巻き込まれに注意！

~~~~~「県産米7・8・9作戦」の展開~~~~~

玄米たんぱく質含有率7.0%以下(乾物換算)、整粒歩合80%以上、1等比率90%以上のブレのない米で、買ってもらえる米づくりを進めよう！



連絡先 農産園芸課稻作振興グループ
県庁内線 5074、5075
直通 017-734-9480

- ◎ 次回の稻作生産情報の発行予定は5月8日です。